

インタープリテーション、哲学、エコロジー運動 ——アルネ・ネス氏追悼——

Interpretation, Philosophy and Ecology Movement: A Tribute to Arne Naess

藤 公晴
TO, Kimiharu

わが師そして同志、故ビル・ディボル博士 (Bill Devall) に捧げる。

本名 : Arne Dekke Eide Næss

2009年1月12日自宅で就寝中に死去、96歳。1912年ノルウェー、オスロ近郊生まれ。24歳で博士号取得。1939年27歳でノルウェーのオスロ大学哲学科学科長に就任。1969年まで同学科長。自らの思索および社会的活動に集中するという理由で1970年に退官し、オスロ大学名誉教授になる。活動する哲学者、そしてディープ・エコロジーの産みの父として広く知られる。Drengson (2005) によると、ネスの学術系図書は30冊、論文は400本を超えており、出版されていない論文はおよそ300という。ネスの作品については、10巻からなるアルネ・ネス選集が2005年にSpringer学術出版から刊行されている。

唐突だが、次のような主張を吟味してみてほしい。「地球環境問題への対応には、私たちそれぞれの価値観・生き方まで掘り下げて考える必要があり、省察的なアプローチを軽んじる目先の取り組みには限界がある」や「人間と自然やいきものとの関係とは想像以上に豊かで深遠なものである」。人間が地球上でのさばることなく、他の生物とともに生きていくための哲学、エコソフィアの探求。

こうした考えは、エコがむしろ騒々しい今日であれば、違和感の少ないものだろう。今年の年明け間もないころ他界したアルネ・ネス氏 (以下敬称略) は、世界が経済成長・科学技術化をゆるぎない神話と信奉していたころから、古今東西の哲学や思想の融合を主張し、世界各国で展開したエコロジー運動の支柱として、自らの生涯を捧げた。いや、結果的に捧げることになっただけで、彼自身は彼の生に没頭しただけなのかもしれない。

ネスの訃報は、人文社会科学にかかるメーリング・リスト¹を通して知ったが、その後各国の主要メディアによるネスの訃報の扱い²を目の当たりにすることで、あらためて彼の社会的貢献と影響を確認した。機を失する前に彼の歩み、とりわけディープ・エコロジー運

動への関わり以前の生い立ちや出会い、人生の選択などを業績に照らし合わせながら辿り、自分なりに活字にすることが、ネスから多くを学んだ筆者に出来ることと思今回の投稿に至った³。

■ 幼少から青年期

アルネは1912年1月27日、Ragner & Christine Naess 夫妻の4人兄弟の末っ子として生まれた。父Ragnerは彼が一歳を迎える前にガンのため他界した。母Christineは、オスロから電車で4時間程のハリングスカルブ山地 (Hallingskarvet) 国立公園の近くに小さなキャビンを所有しており、そこへ幼いネスらを頻りに連れて行った。とくに年上の姉らの教育に母が力を注いだ分、ネスは独りで遊ぶ時間が増え、自然の中で頻りに過ごした。またその頃、幼いネスに惜しめない愛情を注いだ家政婦に対して、母は理解を示すことなく解雇してしまった。それを機にネスの母に対する愛情は急速に薄らいでいった (Drengson 2005, 10) ⁴。父の存在を実感することのないまま、母との距離感を置き始めたネスにとって、極北の壮大な地形と自然を体現した Hallingskarvet の山々は父のような存在となった。山々で過ごした時間・経験が彼の自然観や哲学、想像力そして登山技術の基盤になった。1936年にPh.Dを取得した後、ネスは彼自身の小屋をハリングスカルブ山地の急峻で風の強い場所に建て、Tvergastein という名称をつけ、思索活動の生涯の拠点とした (Naess 2002, 20-23)。ハリングスカルブ山地を軸にした彼の回想録 (およそ邦題:「ハリングスカルブの山々: 永遠の生命をもつ偉大なる父」) を最近の著作に残している。

ネスがスピノザの思想やガンジーの非暴力市民的不服従の考えと実践に出会ったのは彼の10代後半から20代前半の頃であった。スピノザの哲学に出会ったのは17歳の時、山で偶然出会った登山家・同国最高裁判事 Ferdinand Schjelderup 氏の勧めでエチカを読

み始めた (Naess 2002, 9)。また登山遠征中のテントの中、ヘッドライトのもとでスピノザのエチカを読む在りし日のネスの姿の写真がウェブ上に残っている。人間の感情的側面を尊重させつつ、それを自然哲学に取り入れたスピノザをネスは高く評価している (Naess 2002, 9)。彼がガンジーの非暴力市民的不服従運動の考え方に会ったのは、1930年にガンジーらが行った塩の行進 (イギリス植民地政府による塩の専売に反対するために約 380km 行ったデモ行進) の出来事を扱った記事を読んだときで、強い感銘を受けたネスはそれを生涯の行動規範にすることを決意した (Whitaker 2006, 115) ⁵。

1933年、オスロ大学で数学と科学をテーマに修士号を取得した後、ネスは単身でオーストリア・ウィーンに留学した。ネスにとってこの期間は結果的にウィーン学団の論理実証主義者らとの親交を深め、彼の実証論的言語哲学の研究の基礎を確立した貴重な時期であったが、当初の留学目的は、プロのピアノ演奏者になるべく音楽を学ぶことだった (Naess 2002, 64)。ウィーンの著名な音楽アカデミーのマスターレベルへの入学が許可されたものの、想像を超えた激しい課題・練習を受け入れることができずわずか6週間にして「ノルウェーの祖母の訃報」という理由を盾に担当教授を説得した。探究のテーマを大幅に変更したとはいえ、ネスにとって音楽は人間の情操や感情、とくに理性との対比・バランスについての論考を加える上で、そして解釈行為における主観性を考える上で極めて重要な人間の営みであり、彼の最後の著作 *Livsfilosofi: Et personlig bidrag om* (後述) で音楽の役割と意義を解説している。

ネスがウィーン学団の論理実証主義の研究者らとの議論を交わしたのはその後の1934から1935年の間である。ネスはその間とくに、フロイトの精神分析を学び、さまざまな精神障害をかかえる患者を相手に臨床実践を行った。そのカウンセリングの内容分析を通して、哀れみや共感、精神を病んだ人たちへの救済の限界への理解を深めた (Naess 2002, 24-25, 130-132)。1936年、彼はドイツ語で博士論文 (タイトル: "Erkenntnis und wissenschaftliches Verhalten" 認識と科学的態度) を完成させた。それを讀んだアメリカの分析哲学・論理学者 ウィラード・ヴァン・オーマン・クワインはネスの博士論文の表紙に「わたしの最上の敬意をもって、いつの日かこれよりも優れた論文を書きたいと願っています」と記している⁶。

■ ネスの功績の偉大さとは？

ネスは、1939年から54年まで同国唯一の哲学の教授で、当時の大学レベルにおける哲学の必修科目は彼の監修のもと取りまとめられた。1998年 Routledge 社発行の哲学百科事典 (*Encyclopedia of Philosophy*) はその第4巻のネスの項目 (635-638) を次のように書き始めている。

ノルウェーの哲学分野の発展に貢献。1940年から45年のドイツの占領期にはレジスタンス運動に活発に関与。また1940から50年代にかけて同国における科学哲学者らからなるオスロ学派の生成発展に大きく貢献した (635)。

ネスはノルウェーが欧州・諸外国に誇る文化人だった。第二次世界大戦中、当時すでにオスロ大学の教員でドイツ語が堪能であったネスは、ノルウェーの諜報機関 (XU) の一員としてドイツ・ナチス軍による占領活動に関する情報収集を行った (Whitaker 2006)。戦後、第二次大戦中捕虜や行方不明になったノルウェーの軍人らの捜索や保護の活動に従事した。この貢献で1998年に同国王よりメダルが授与されている。

その後、東西冷戦の緊張感が高まる1940年代後半、設立間もないユネスコは「国際理解の弊害となる緊張状態 (Tensions Affecting International Understanding: The Human Sciences and World Peace)」というタイトルの共同研究プロジェクトを実施し、ネスをその社会科学の研究者の一人に選んだ。ネスを含む8人の研究者らは、旧共産圏を含む世界各国を対象に「民主主義」や「真理」といった表現の根底にある解釈や意味づけ、価値観の相違について調査を行い、排外的な民族および愛国主義、偏見など、戦争をひき起こす要因について議論を交わし、多数交わされた意見や見解の中から12項目の共同提言を取りまとめた⁷。岩波書店の月刊誌『世界』は、声明が出された翌昭和24年1月、その12項目すべてを日本の学者ら約60名によるコメントとともに報告した。ここですべてを紹介できないので、その一部、現代におけるコミュニケーションの課題というテーマの箇所を抜粋する⁸。

現代における高速、広範な交通手段の発達、世界的連帯性の促進に大いなる助けとなりうるものである。だが、同時にこの発達は、事柄の真偽を分別したり、自分たちが欺かれ誤られていることを認知したりできない立場におかれた非常に多くの人々にまで、歪曲された真実が伝達されるという危険を、一

層大きくするものである。したがって国際連合諸機関の特別な責任でなければならぬ。(中略) もし世界各国国民が彼等自身を、他国民が彼等を見るとおりに見ることができるようになったならば、それは平和促進の大きな力となるであろう。

この共同研究で、ネスはとくに民主主義や真理に対して多様な解釈や意味、そしてそうした多様性の存在を認める姿勢が重要であると指摘した⁹。

少年期からノルウェーの山々で登山技術を磨いたネスは、ノルウェーの登山界に初めてボルトを用いた登攀技術を導入した人物としても知られている(Kolsås Klatreklubb 1992)¹⁰。またネスは1950年、パキスタン北部カラコルムのティリチ・ミール(Tirich Mir)峰に最初に登頂したノルウェー隊のリーダー、そして1964年の同峰遠征の隊長としてノルウェー登山界にもその名を残している。

この1950年代頃から60年代後半にかけて、ネスは概念の解釈や意味の生成、コミュニケーションに関する業績を数多く残した。その重要な作品の一つとして、英文で出版した『インタープリテーションと解釈の正確さ(Interpretation and Preciseness)』(1949)が挙げられ、言語そのものの分析より、現場で起きている議論などのコミュニケーションを分析し、そのやり取りや関係性から意味の抽出を目指す実証的アプローチとその分析方法の共有を説いた。また1966年には『コミュニケーションと議論(Communication and Argument)』(1966)を完成させ、オスロ大学における歯学と薬学専攻をのぞいた学部への入学生の必修図書として長年使われてきた。こうしたネスの研究は議論学の発展にも大きく貢献した(Eemerens, Grootendorst and Henkemans 1996)¹¹。

1958年には科学哲学や意味論などを領域横断的に扱う哲学誌『Inquiry』¹²を創刊し、初代編集長として同誌の舵取りを担った。1975年にはスウェーデン・ストックホルム大学より名誉博士号を受け、1977年にはソニング賞(Sonning Prize)¹³という、欧州で優れた社会貢献を行った学者等に与えられる賞を授かった。

ネスの貢献の核心を自分なりにまとめると、彼の解釈という行為への真摯な洞察力に集約されるのでは考えている。彼は「解釈」がいかに私たちの生活に深く密着しており、それが私たちそれぞれの世界観やもの見方・理解、人間関係に大きく影響を及ぼす行為である、ということを知っていた。不安定な意味を孕んだことばを媒体に成り立つコミュニケーションとそこから創出される社会と人間の多様性。彼の業績を、

ディープ・エコロジーを打ち出した1970年代前半¹⁴に境に、前期と後期に分けると、解釈という行為を分析哲学や論理学、科学哲学の見地から成熟させた時期を前期、前期で得た解釈の知見をエコロジー哲学やさまざまな取り組みに汎用した時期を後期と捉えることが出来る。

■ ディープ・エコロジー運動という解釈行為、その応用

ネスの「長期的で深遠なるエコロジー運動(Long-range deep ecology movement)」という名称や哲学、そしてその妥当性については、他の筆者らが詳しく論じるであろう。1970年以前のネスの業績に照らし合わせ、筆者の評価を挙げるのであれば、ネスの解釈行為に秘められた戦略性である。まず一般的な表現で説明すると、ネスのディープ・エコロジーという名称とシャロー・エコロジーとの対比が、それへの賛否両論を含めて、環境問題に関心をもつ多くの国々の人々の関心・注意を「環境問題の取り組みにおける短絡さとは? 思慮深さとは?」という点で喚起した点である。それは当時混在しつつあった環境保全の取り組み群を分類・ラベル化する解釈行為で、当時の情勢をふまえると極めて戦略的な対比であった。つまり、経済成長や科学技術を信奉し、オルタナティブな社会や文化、教育像についてひろく熟考することを怠った取り組み群と、冒頭で述べたより真摯な取り組み群とを対比させた解釈であった。ネスがこれを行った1970年代前半という時期は、深刻化する環境問題をメインテーマに人類が初めて世界規模の国連ストックホルム会議を行った頃で、絶好のタイミングを捉えたものであった。

ネスによるディープ・エコロジーという体系化は、異なった哲学や思想などの共通点を融合するといった一元的な折衷主義にとどまるものでなく、そうした哲学や宗教体系はあくまでも個々の究極的な前提であって、その先にあるレベル、さまざまな状況に応じた社会的実践へと昇華させるための基盤として位置づけられている。こうした哲学⇔実践の相関を体系化したものがエブロン・ダイアグラムであり、ディープ・エコロジーが折衷思想を超越した多元的な哲学⇔実践システムであることを示す表象なのでもある。多様な立場や価値観、言語を持った人々の思考を喚起する理論的な枠組みを紡ぎ出したという点に、筆者はネスの解釈行為への造詣の深さを見いだしている。

■ 人生の哲学

1998年、ネスは最後の著作となる *Livsfilosofi: Et personlig bidrag om*¹⁵を上梓し、幼少期からのさまざまな経験を回想しながら、彼の世界観や哲学との関連性について論じた。人口約480万の国で、ノルウェー語の初版が約15万部売れたことが、彼と彼の思索への国民的関心の高さがうかがえる¹⁶。この作品におけるネスの主張は、私たちの情操的側面をより豊かにすべきという点で、日々身の回りで起きている出来事や自分自身、社会に対して抱く感情的な側面をより頻繁に、そして気軽に他者と共有し合うべきだと強調する (Naess 2002, 54)。ネスにとって情操的側面とは人間の創造力の源であり、私たちが善なる行為へと誘う熱意やモチベーションに通ずるものと主張する。そして、こうした側面を欠く理性とはあくまでも表層的なもので、道理に外れたものに過ぎないと繰り返し述べる。スペースの都合上、この辺りを詳しく紹介できず心苦しい。彼は以下の公式を提示して、情操的側面と人生を豊かさの関係を示した。

$$\text{豊かさ} = \frac{\text{生への熱意の二乗}}{\text{身体的苦} + \text{精神的苦}}$$

ネスは「仮に身体的・精神的苦が増すことがあっても、熱意さえあれば人生は必ず豊かなものになる」と述べる。そして「熱意には、競技スポーツや探検のみならず、友情や男女関係、すべての創造的活動も含まれる」や「熱意とはつねに二乗化するが故、苦とはその類を問わず些細なものだ」とも述べる。

これは楽観的な挑発に見えるだろうか。生への熱意はそれなりにあるつもりだが、苦を深く体験したことはない筆者には、簡単には飲み込めないものだった。例えば、そもそも熱意とは苦と無関係に存在するものなのであろうか？ ネスの歩みを辿る過程で垣間見えた彼の熱意には少なからず動かされたが、ネスの歩みとそこから生まれた哲学は唯一無二であって、そうした彼の熱意に対する視座とは万人に必ずしも当てはまるものでないかもしれない。いや、無気力・ニヒリズムが現代的傾向であるからこそ、ネスは熱意を強調したのかもしれない。古今東西の人々の反応を知りたい。合掌。

【注】

¹ 人文および社会科学系研究者の H-Net Academic

Announcements (参加者数10万人、90カ国)の
一つの H-Environment

<www.h-net.org/~environ/>

² Philosopher Developed 'Deep Ecology' Phrase By
Patricia Sullivan
Washington Post Friday, January 16, 2009; B08
www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2009/01/15/AR2009011504063_pf.html
New York Times, January 14
www.nytimes.com/2009/01/15/world/europe/15naess.html?_r=1

The Guardian, January 15
<http://www.guardian.co.uk/environment/2009/jan/15/obituary-arne-naess>

その他、Le Monde 紙、01/22 付、中国网 china.com.cn 01/24 付、La Jornada 紙 01/13 付など。

³ 筆者は、15年ほど前、サンフランシスコ、ディーブ・エコロジー財団主催の会議に参加した際にネス氏に初めて会話を交わす機会をえた。詳しい会話の内容を覚えていないが、当時筆者はディーブ・エコロジーのアンソロジーの翻訳作業に関わっていた時期だったので、初めてにもかかわらず暖かい励ましをもらったことをはっきり覚えている。他の誰からも感じ取ったことの無い、何事も歓迎する温厚さの中に鋭さを感じ取った。

⁴ Drengrson, A (2005). The Life and Work of Arne Naess: An Appreciative Overview. *The Trumpeter*. 21 (1) : 5-47. URL

<http://trumpeter.athabascau.ca/index.php/trumpet/article/view/40/35>

⁵ Whitaker, A (2006). Five Things You Should Know about Arne Naess. *The Trumpeter*. 22 (1) : 113-121. URL

<http://trumpeter.athabascau.ca/index.php/trumpet/article/view/36/31>

⁶ <http://www.worldwidebookshop.com/detail/14605AB/> や

<http://www.choosebooks.com/offers/ogden-basic-for-science.html> を参照。

⁷ 参考までに8名の学者の名前は、Gordon W. Allport, Gilberto Freyre, Georges Gurvitch, Max Horkheimer, Arne Naess, John Rickman, Harry Stack Sullivan, And Alexander Szalai。

⁸ 抜粋箇所については筆者の判断で当用漢字に変更した。当該声明文のタイトルは「平和のために社会学者はかく訴える：戦争をひきおこす緊迫の原因に関して、八人の社会学者によってなされた声明」世界岩波書店 1949.01 (通号 37) 16~22 ページ。日本側からの参加した学者陣は、小泉信三、安倍能成、和辻哲郎、鈴木大拙、鶴見和子、都留重人、丸山眞男、清水幾太郎、久野収らで、これを契機に 平和問題談話会が結成された。

⁹ その他、Fox, W. (1992) Arne Naess: A Biographical Sketch. *The Trumpeter*. 9 (2) : <http://trumpeter.athabascau.ca/index.php/trumpet/article/view/426/697>

¹⁰ Kolsås Klatreklubb (1992) *Kolsås:*

Klatreparadis og naturperle. KKK: Oslo.

¹¹ Eemeren, F. H. van, Grootendorst, R. and Henkemans, F. S. (Eds.) (1996) *Fundamentals of argumentation theory: a handbook of historical backgrounds and contemporary developments*. Lawrence Erlbaum Associates またこの時期のネスの著作については、Flo, O. (1971) . Arne Naess: Selected list of his philosophical writings in the English and German languages. 1936–1970. *Synthese*. 23 (2-3) : 348-352. を参照。

¹² 初代編集委員には、ドイツの論理実証主義哲学者の ルドルフ・カルナップ (Rudolf Carnap)、米国の哲学者・記号論研究者のチャールズ・W・モリス (Charles W. Morris)、米国の哲学者のアブラハム・カプラン (Abraham Kaplan)、社会人類学者のアーネスト・ゲルナー (Ernest Gellner)、スイスの心理学者 ジャン・ピアジェ (Jean Piaget)、米国の社会学者 ロバート・キング・マートン (Robert K. Merton) などが選出された。

参考までに、Thomson Reuters 社発行の *Journal Citation Reports 2007* によると、同誌の学界への影響力 (Impact Factor) を示す数値は 0.894 で、倫理学分野におけるランキングは 28 誌中 9 位となっている。

¹³ 同賞の最初の受賞はウィンストン・チャーチル、第二回はアルベルト・シュバイツァー、第三回はバートランド・ラッセルに贈られており、ネスの前前年にはカール・ポパー、前年にはハンナ・アーレントが受賞している。ネスが受けた他の賞は次のとおり。ノルウェー国王による The Star of St. Olav's Order (2005)、同王国議会による The Peer Gynt award (2004)、北欧理事会による The Nordic Council Award for Nature and Environment (2002)、ストックホルム大学による The Ugglå Prize for Humanistic Studies (2002)、ハーラル 5 世、同国王による A Diploma and Medal (1998) for his contribution in the Intelligence Agency XU during the German occupation, the Medal of the Presidency of the Italian Republic in 1998; スウェーデン・アカデミーによる The Nordic Prize (1996)、国際赤十字による The Mountain Tradition Award (1996)、the Mahatma Gandhi Prize for Non-violent Peace (1994)。

¹⁴ 参考までに同国の環境保護運動へのネスの積極的関与と影響については 1960 年代と指摘されている (Grendstad et al. 2006)。

¹⁵ 同書の英訳はジョージア州立大学出版局 University of Georgia Press から *Life's Philosophy: Reason & feeling in a deeper world* というタイトルで 2002 年に出版された。邦名は「生き方の哲学—より深遠な世界における理性と感情」になるであろう。

¹⁶ 15 万部という数値は、2003 年 8 月にネスヘインタビューを行った Margarita G. Notario による (Trumpeter 2006, vol.22 (1) ; 106)。これを人口約 1 億 2 千万の日本と比較してみると、例えば、浅田彰氏の『構造と力』は約 15 万部。映画「おくりびと」の原点となった青木新門氏の『納棺夫日記』(文春文

庫) は 30 万部売れたようだ。また、横浜国立大学の中西準子氏によると、養老孟司氏と池田清彦氏の共著『ほんとうの環境問題』は 60 万部を超えているのは、とは推測している。中西氏の URL: http://homepage3.nifty.com/junko-nakanishi/zak441_445.html#zakkan442 を参照。